

人間の問題はつまるところ言葉の問題である。これを「人の言葉」に限定するところに無神論が生まれ、世俗主義が誕生する。信仰とはこれら人間主義を突き抜けて、人の言葉の背後に響く「神の言葉」と出会い、この言葉に聞く者として生きることの意味する。それゆえ聖書は神の言葉による万物の創造を語り、御言葉の受肉を語り、神の言葉そのものとしての主イエスの受難と死を語り、

住み給う、活ける神の言葉そのものである。その際、言葉は顔と顔を合わせての双方向の作用（即ち「声」として想定される。神がその御顔を隠されることが御言葉の喪失を意味するのはこの故である。この神と人との間に行き交い、活きて働く御言葉こそが、人と人の間に愛を運ぶのである。つまり、人間は本質的に言葉によって創造され、言葉に向けて生きる存在なのである。

すぐれて現代的な状況が出来た。パソコン通信等に代表される電子メディアの隆盛がそれである。人は口承の世界から識字の世界へと、順次成長してゆく。「獨創性」「分析」「真理」「抽象化」といった識字体験本来の特性が人に「現在からの分離」をもたらし、この事において人間に固有の「セルフ自己」の形成が可能となる。この自己の形成がスムーズに行われる為には遊び

の本の論調自体の希少性による。専門書の配備数において日本有数といわれる書店ですらパソコン文化そのものに真の警鐘を鳴らす書物に出会うことは希であると言つてよい。私は、教会すらが無批判に、あるいは積極的にパソコン文化の中に埋没して行くことに対して批判的な意見を持つものである。幼少期の子を持つ親を対象とする講演会において、親の課題はこの時期の子どもたちを如何にパソコン文化の浸食から守り、遊びと書物に親しむ環境を確保するかにあると繰り返し説いている。

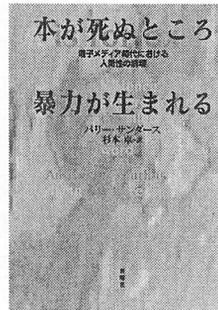
## 私の選んだ一冊

### 『本が死ぬところ暴力が生まれる』 電子メディア時代における人間性の崩壊

バリー・サンダース 杉本卓訳

日本基督教団大和キリスト教会牧師

岡本 知之



その神の言葉の復活を語るのである。使徒言行録が語る聖霊降臨の出来事も、正しくは神の顕現のしるしとしての「火」と、その「分かれ」としての「舌」言葉」を提示することにより、「神の言葉」そのものが、キリストを信じるすべての者に分与される賜物（即ち「聖霊」として与えられたことを意味するのである。

今回紹介する著作は、表だってキリスト教世界のカノンに依拠する本ではないが、その示唆するところは、言葉をめぐる教会の闊い課題を端的に示すものとして興味深い。

を中心とする口承文化の享受が不可欠であり、その基礎の上に、初めて十全な識字体験が成立する。

人間が言葉によって成立する存在であるならば、自己を形造るものが単なる人間の言葉に終わるのでなく、神の言葉、なかならず復活の神の言葉たるキリストにこそ出会うものでありたい。説教者の使命は、人間の言葉で埋め尽くされたこの世界に、魅りの言葉たるキリストを宣べ伝え、その御声を響かせることにあるのである。この時、これらの著作もまた、世に流される事の多い私たち自身の現在を、自覚的に検証する為の良き手だてとなってくれるであろう。

聖霊とは、父なる神と子なるキリストより発出してわたしたちの内に

近年この人間の成立（つまりその自己同一性を基盤とする統合的人間の成立）を困難にするところの、

この現状に対する処方箋については是非本書をお読みいただきたいが、私が今回この本を紹介するのは、こ

（四六・三七六頁・本体二八五〇円・新曜社・一九九八年）

性（の成立）を困難にするところの、

私が今回この本を紹介するのは、こ

私が今回この本を紹介するのは、こ

（四六・三七六頁・本体二八五〇円・新曜社・一九九八年）